

沖縄における梵字碑の語意と真言宗との関わりについて

森下一成(東京未来大学教授)

はじめに

2021年度の本大会報告では沖縄本島における梵字碑の分布と固有信仰との関わりについて報告した。今年度の報告では沖縄における梵字碑の語意と真言宗との関りについて報告する。

1 梵字碑のモデル(型)とその意味

梵字碑はおよそ2つの型に分けられる。すなわち、「バン」などの種字一字のもの、「アビラウンケン」のように特定の神仏に対する真言(マントラ)である。

(1) 種字一字

種字とは、『密教大辞典』によれば、「諸尊に皆種子の字あり」とあり、通常「金剛界にては真言の尾字を用ひ、胎蔵界にては真言の首字を用いる。筆者が現認した梵字碑には「バン」という梵字が刻まれた例が少なくないが、金剛界大日如来の真言「オンバザラダトバン」の尾字をして種字としている例である。種字は、真言宗など特定の宗派においてのみ用いられるのではなく、およそ仏教各派において用いられる。密教における主尊・大日如来は、さまざまな如来や菩薩などに化身であり、真言密教の教義・法身説法説によれば、人だけでなく、さまざまな自然物の姿を借りて真理を説くと言われている。

(2) 真言

真言とは、『密教大辞典』によれば、マントラと同義としたうえで、神仏の「聖徳等を思念し得る」としている。筆者が現認した梵字碑については、「アビラウンケン」と「オンアボギャベイロシヤノウマカボダラ マニハンドマジンバラハラバリタヤウン[唵阿謨伽尾盧左曩摩訶母捺羅麼尼鉢曇摩怛婆羅波羅波利多耶吽]」の真言を確かめることができた。前者は宇宙を構成する「地、水、火、風、空」を意味し、同時に宇宙の中心に在る胎蔵界大日如来の真言である。一方、後者は一般に光明真言と呼ばれ<sup>1</sup>、これもまた大日如来の真言であるとともに、一切仏菩薩の総呪といわれている。真言宗の行法に光明真言法があるが、これは主として滅罪や息災を目的とする。また、この行法には土砂加持という白色の砂を光明真言で祈念する作法が加わることもあるが、土砂加持は亡者の離苦得脱のためにも修せられる、この碑を用いて真言行者が土砂加持を含めた行法を行い、集落の安寧を祈ったことが伺える。

2 真言宗と集落祭祀

沖縄における仏教受容は、王家とその藩屏である土族を中心に、特に真言宗と禅宗が主だった。梵字碑の分布が中南部を主としているのは、こうした琉球王朝の仏教受容の影響であろうが、禅宗ではなく、真言宗が集落祭祀に取り入れられた理由は、集落祭祀の性格の一つに挙げられる呪術性と親和するところが大きかったからであろう。さらに、梵字碑が北部地域において多く見いだせないのは、真言宗を沖縄に広めた日秀上人の活動の履歴とも符合するのである。

<sup>1</sup> 正しくは不空大灌頂光真言。「不空羂索神變真言經」「不空羂索毘盧遮那仏大灌頂光真言」に説かれる。

## 研究発表

教室3(C203教室) 第1部 14:00~15:30

### 伝統的キリスト教の可能性

桐生信 (錦西ふる里の家教会 司式牧師)

今日でも伝統的キリスト教を、絶対的真理として信じている人々は、一般的に思われているより、世界でも日本でも大勢存在している。しかし、他の多くの違った立場のものを考察したうえで、自ら信じる体系が絶対的真理であるかを、これを信じる人々によって確かめる事は殆どなされていない。それでいて絶対的真理であると主張するので、一般からは、時代錯誤であるとか、排他的と捉えられている。

しかし、もし伝統的キリスト教が絶対的真理であるならば、それが他の思想や宗教とふれても動じないはずである。また、真理はすべてに通じるわけであるから、他のものとの共通するところを通して、互いの間の対話が成り立つといえる。そして、他のそれらが無意識で目指しているのは絶対的真理であるから、この真理はそれらを説明し、真の意味でそれらを成就するものとなるはずである。

この仮定に立ち、私は主に高等学校の倫理の教科書を通し世界の哲学、宗教、日本の思想などから始めて上記の仮説を確かめて行った。その結果、確信を得られたので、さらに 13 宗あるといわれる日本の仏教の各宗派について調べてみた。各宗派のエッセンスと新旧訳聖書の言葉とを対応してみたところ、実によく通じると思えるので、キリスト教徒でなくても興味を持っていただける発表になれば幸いである。

研究発表

教室3(C203教室) 第1部 14:00~15:30

### Buddhism in karate life and practice of Srilankan Buddhist karate practitioners

Petra Maveekumbura Karlova (Palacky University)

マヴェークムブラ・カルロヴァー・ペトラ(パラスキー大学助教)

Religion plays important role in shaping the life of its religious people. There are many discussions whether Buddhism is religion or philosophy or way of life; however it is true that Buddhism more or less shapes lives of Buddhist people. This goes even for Buddhists who practice karate. Therefore, this research focuses on the topic of the Buddhism in karate life and practice of Buddhist karate practitioners in Sri Lanka, where Theravada Buddhism is alive as prevailing religion.

There are numerous studies on the relation of Buddhism and martial arts. Older works (Nitobe, Deshimaru, Hegel, Donhue, Krug) advocate close relation between Buddhism and martial; and there is popular belief that Zen Buddhism influenced martial arts. However, latest researches by Benesh or Benett denies this connection. Namely, Benesh points out that Japanese samurais naturally had contacts with Buddhist masters of various schools, not unicaly Zen Buddhists. Moreover, it is known that Confusianism may have bigger significance in the history of samurais. Still, since Okinawan karate master Funakoshi Gichin and others successfully spread their opinions on the links of Buddhism and karate, many karate practitionners find Buddhism useful in their karate life.

This research does not aim on proving the influence of Buddhism on karate. But it tries to bring a different perspective on the topic from the case study of Sri Lankan practitionners, to shed light on how Buddhism and karate can be related in the life when Theravadin Buddhists practice karate. The originality of this study consists of concentrating on Theravada Buddhism while majority of the previous works deal with Mahayana Buddhism that is connected with the Japanese and Chinese martial arts. The research methods is semi-structured interviews to Sri Lankan Buddhist karate instructors. The hypothesis is that they may bring Theravada Buddhism into their karate life and practice. However, Theravada Buddhism is very complex religion and culture as well as people's life are not same, so also the results are expected to be diverse. Nevertheless, it seems clear Sri Lankan Buddhist karate instructors may find common points between karate and Buddhism.

2016年以降の中国における韓流ドラマの受容

石俊彦(東北大学大学院・院生)

韓流は21世紀に東アジアで起こった韓国大衆文化の流行という文化現象で、近年世界的にも巨大な人気を集めている。1997年中国中央電視台で放送された『愛が何だって』のヒットにより、中国における韓流ブームが始まり、「韓流」という概念も出てきた。それ以来、20年以上にわたって中国における韓流ドラマの受容が持続している。しかし、2016年「サードミサイル配置事件」以来中国における韓流ドラマの受容が衝撃を受けて、韓流ドラマの受容状況は昔と比べて大きく変わった。そこで、本発表では2016年「サードミサイル配置事件」以降の中国における韓流ドラマの受容に着目し、視聴者、視聴方式などの多方面からこの時期の中国における韓流ドラマの受容状況及び特徴を解明したい。

中国における韓流受容に関連する先行研究は主に2016年以前の受容状況に集中し、2016年以降の韓流ドラマに対する研究は数少ない。その中で、松田<sup>1</sup>のように2016年THAADミサイル配備決定の「韓流」への影響を検討したものや、呂<sup>2</sup>をはじめとする2016年以降の韓流ファンの意識変化に着目したような論説が見られる。しかし、これらの研究は主にコンテンツ業界やファンダムに着目し、テレビドラマ領域における韓流の受容は無視している。2016年以降の中国における韓流ドラマの受容に関連する研究はかなり不足している。

以上の論を踏まえた上で、本発表では2016年以降の中国における韓流ドラマの受容に着目し、2021年に公式的に韓流ドラマが放送再開された時点によって分け、2016-2020年及び2021-2023年という二つの時期から中国における韓流ドラマの受容状況を考察し、視聴内容や視聴方式などの方面からこの時期の韓流ドラマの受容状況および特徴を検討する。これらの作業を通じて、以下のことが明らかになるだろう。

1. 2016年以降の中国における韓流ドラマの受容はインターネット中心という特徴がより明確になった。視聴活動およびファン活動は主にインターネット上で行われている。韓流ドラマの視聴方式から見ると、2016-2020年のファンサブ主導および2021年以降のファンサブと動画配信サービスの併用という二つの段階があり、テレビ放送の存在は見られなくなった。そして、韓流ドラマに関連する情報はWeiboなどのSNSを通じて流通し、SNS中の韓流ファンのコミュニティーは重要な役割を果たしている。

2. 2016年以降の中国における韓流ドラマの受容について、政府からの影響が弱体化され、民間主導という傾向が明らかになった。2016年以降韓流ドラマの輸入が一時的に中断したが、韓流ドラマ視聴者の視聴活動は持続している。そして、この時期韓流ドラマの受容に影響を与える要素について、政治より伝統文化をめぐる紛争がより顕著な存在になった。

<sup>1</sup> 松田春香(2018)「中国における「韓流」放送コンテンツの変容と中韓関係の影響」(『コミュニケーション文化論集』16:P95-111)

<sup>2</sup> 呂婉琴(2021)「粉絲民族主義與中韓關係的嬗變——以中国K-pop粉絲群體的身份演變為主線」(『外交評論』2021(1):P70-99)

北朝鮮・ジェンダー・映画

——ラブコメディ『金ドンムは空を飛ぶ』を手掛かりに——

李恵慶(大阪経済法科大学研究員)

本発表の主な目的は、北朝鮮映画『金ドンムは空を飛ぶ』(英タイトル:Comrade Kim Goes Flying, 2012年)の映画史的意義と特徴を浮き彫りにしながら、それを手掛かりに現代北朝鮮における文化変容を明らかにすることである。とりわけ本発表では、1973年に発表された金正日の映画芸術論を念頭に入れ、この映画の特徴を通時的・共時的にあぶり出しながら、主要登場人物のジェンダー表象を中心にテキストを読み直す。これを通じてこの映画がどのような映画史的意義をもち、世界の人を魅了しているのか、そして現代北朝鮮にどういった文化的な変化をもたらし、いかなる可能性を秘めているのかを探してみる。

北朝鮮では建国以来、映画が国家事業の一つとして重要な役割を担っている。政治体制や経済発展計画の一部を占めているだけでなく、人民大衆にとっては最も身近に親しめる娯楽としてこれまで実に多くの作品が作られてきた。そんななか、2000年代に入って北朝鮮の映画をめぐる状況が大きく変わった。なかでも際立ったのが海外との合作映画の増加である。本発表で取り上げる『キムドンム空を飛び』はその最も成功した事例として北朝鮮の映画史に残る異色の映画である。

この映画は北朝鮮、ベルギー、イギリスの3か国による合作映画で、2012年9月にカナダで開かれた第37回トロント国際映画祭(コンテンポラリーワールドシネマ部門)で初めて公開された。そしてその直後、第13次平壤国際映画祝典で上映された——一般市民には2016年1月3日のテレビ放送によって公開された——後、アメリカやイギリス等の様々な国際映画祭に招聘され、世界的な注目をひいた。韓国では2012年10月に開催された第17回釜山国際映画祭を皮切りに、光州国際映画祭、ソウル国際建築映画祭、富川国際ファンタスティック映画祭等で特別上映され、今もなお上映が続いている人気作品の一つである。

映画の物語を組織立てているのは、炭鉱で働く女主人公の幼い時からの夢と愛である。空中曲芸師になることが夢である彼女が、北朝鮮一の平壤サーカス団に入団し、空中で高難度技を披露するだけでなく、「北朝鮮の娘」として世界へ羽ばたいていく過程が感動的かつユーモラスに描かれている。そのためか、欧米では北朝鮮初の「「ガール・パワー」映画」と見なされており、痛快なラブコメディに仕上がっているこの映画が従来の北朝鮮映画と大きく異なっているのは多言を要しない。だが、この映画はその一言でまとめられるほど単純ではない。そのため、本発表では特にこの映画と同様にサーカスを扱ったラブストーリー『明瞭な舞台』(1966年)に注目し、両作品がどのように繋がっており、そこから何がみえるのかを明らかにしつつ、2000年代の北朝鮮映画について再考し、その変化と可能性を探る。

在日朝鮮人の文化活動<sup>1</sup> —金坡禹の演劇運動を中心に—

呉恩英(済州大学校人文科学研究所 学術研究教授)

1947年度の在日本大韓民国居留民団中央総本部機関紙には、黒丘(張赫宙)の「四十年の嵐」が掲載された後、連載小説が掲載されることはなかった。その後、1960年代に入って金坡禹キムバウの小説「二国の物語」が19回にわたって連載されたが、内容が1930年代のプロレタリア演劇に関わっているためだろうか、次号に「紙面の都合により今回は」休止するということで中断した。その以降、在日朝鮮人作家の作品は掲載することはなかった。

金坡禹は、1950年代末から民団の機関紙『民主新聞』に韓日の文化交流や韓国の文化を紹介する記事と連載小説「二国の物語」を掲載していた。「風雪三十年の歩み」は20回にわたって色々な主題をもって書いたものであるが、主に演劇に関するものである。連載小説「二国の物語」も彼が係って来た演劇をモチーフにしたものである。彼は、1931年11月に日本プロレタリア演劇同盟(PROT)の東京支部傘下の朝鮮委員会、「3・1劇場」などの責任者として、また演出や演技など、色々な分野に携わり、一時期は村山知義とも活動したこともある。1930年代に治安維持法違反などによって日本政府から弾圧され多くの人々が検挙された。これに金坡禹も何回か巻き込まれたことがある。彼が携わっていた「朝鮮語劇団」は朝鮮語での公演を通じて朝鮮の情勢や文化を朝鮮人労働者に伝えていた。このような演劇運動は、戦後の在日朝鮮人にも少なくない影響を与えたと考えられる。

ところが、金坡禹に関する研究は、韓国の一部では「在日朝鮮人の演劇運動」として名前が言及される場合はあるが、彼の作品については取り上げていない。研究があまり進まれていなかったのは、資料が少ないこともあるが、金坡禹の場合は、本名は金寶賢(김보현)で、韓国語の表記は「김파우」、漢字にすると「金波宇」、または「金波禹」など、いくつかの名前で活動したことで同一人物だということを推測しかねないこともあった。

本発表では、いままで取り上げられなかった『民主新聞』に連載した「風雪三十年の歩み」と「二国の物語」を中心に、当時の「朝鮮語劇団」や「3・1劇場」、また戦後総連と民団との対立関係の中での在日朝鮮人の文化活動について検討した上、在日朝鮮人の演劇運動において金坡禹の作品について考察してみたい。

<sup>1</sup>This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea(NRF-2022S1A5B5A16048993).

## 「(さ)せていただく」と「하다(hata)」の日韓対照

李鳳(北海商科大学准教授)

日本語の「(さ)せていただく」は、本来「させる」という「使役・許可」と「ていただく」という恩恵を受ける意味を表す「てもらう」の敬語形とが合わさったものであり、相手に許可を求め、ある行為を相手に遠慮しながら行う表現として知られている。ところが、近年は「サウナで整わせていただきました」、「北海道を旅行させていただきました」のように恩恵や許しを得てそうするとはまったく捉えられない場合にまでその用法が広がっている。文化庁が発表している『敬語の指針』でも誤用が多い表現として紹介されているほど「(さ)せていただく」の使い方はややこしいが、会話でもメールでも大いに使われている。現に「～(さ)せていただく」はワンフレーズとして考えてよく、日本社会の変化、人間関係における距離感の変化、日本語の敬語の変化の決着点におかれ、他人と社会的距離を保ちたいと思う現代日本人のコミュニケーションへの思考の筋道が反映されている表現として評されている(椎名 2021、椎名 2022)。

一方、「(さ)せていただく」を韓国語に直訳すると「～시키서 받다(sikyoseo patta)」となるが、これは韓国語母語話者にとっては奇妙で理解し難いフレーズになってしまう。また、김용각(2017)では、「(さ)せていただく」を韓国語で翻訳する場合、「하다(hata:する)」が意味的に最も近いと指摘されている。「(さ)せていただく」の拡張的な用法とその使用に関しては、日本語母語話者の中でも賛否両論があるが、韓国人日本語学習者が感じる違和感は、さらに大きいのが現実である。上記の例は、韓国語では、「사우나에서 정돈했습니다(サウナで整えました)」、「홋카이도를 여행했습니다(北海道を旅行しました)」のように、「하다(する)」で正々堂々と自分の意志で行ったことを潔い態度で伝えるのが普通である。また、韓国語では「받니다(ます)」が用いられているため、丁寧さにも問題がない。

発表者は韓国人日本語研究者として「(さ)せていただく」は、日本語独特の言い方であり、非常に興味深い表現と感じる。ところが、これまで「(さ)せていただく」は、日韓対照研究においてあまり注目されず、韓国人日本語学習者にとって単に習得しにくい表現として取り扱われてきており、研究の対象にならなかった。本発表では「(さ)せていただく」が発話行為に対して限られた確信やコミットメントを示すヘッジ(hedge)としての機能していることを手掛かりとし、韓国語の「하다(する)」と対照を行い、日本と韓国のポライトネス・ストラテジーの相違について考察する。

## 研究発表

教室4(C107教室) 第1部 14:00~15:30

### モーム『剃刀の刃』と二つの映画化作品

仲矢信介(東京国際大学 国際関係学部准教授)

映画は早い時期から、その源泉を文学作品に求めてきた。そして文学作品の映画化、リメイクは、さまざまな議論を呼び起こし、原作と映画の優劣を論じることも広くおこなわれてきた。原作で得られた感興の再現を映画に求めるなら、「原作通りでない」「原作の感動が伝わらない」などの不満を喚起しがちである。しかし、いったん原作を上位とする立場を離れ、関連はあるが、独立の作品として映画化作品をとらえることによって、別の鑑賞を可能にする。そのような立場から映画化作品、リメイク作品を見直す動きが、近年進行しつつある。

本発表では、サマーセット・モームの『剃刀の刃』(原題 *The Razor's Edge*, 1944)と、同タイトルで映画化された二作品(エドモンド・ゴールディング監督 1946, ジョン・バイラム監督 1983)を、対等に位置づけた上で比較することを試みたい。対等に位置づけるということは、原作を上位と見て、その劣った再現が映画化・リメイク作品であるという伝統的な見方を離れ、オリジナルの再解釈、あるいは自由な翻案—再創造として考えてみることだ。このようにすることによって、原作では封印された可能性が解放され、あるいは原作で十分な展開を見なかった要素が活性化されること等を観察することができる。比較文化・比較文学の近年の発展が、そのような新しい視座をもたらした。

もとより、およそ芸術として異なる性質を有する二者であってみれば、比較はまずは慎重に、比較しうる側面だけに絞る必要がある。プロットの構造、エピソードの取捨ないし変更、設定や人物の加除、変更がどのような効果を挙げているか、など。しかしながらそれに加えて、映画というメディア特有の性質からの再創造についても検討することが可能である。どのような構図で場面をカメラに収め、どうつなぎ、組み合わせるか、ある人物の台詞と同時に他の人物はどのような表情や動作を見せるか、照明をどう活かすか、どのように音楽、音響効果を付加するか等、言語のみによって成立している小説には不可能な、映画ならではの表現が何をもたらしたか、それがどのように新たな創造を可能にしたか、等を査定することができる。ここでは特に中心的な課題として、原作小説の欠点としてしばしば指摘されていることに焦点を当て、それが映画ではどう取り扱われ、あるいは変容を見せているか、作品トータルとしての再創造がどのようにおこなわれているかに着目して、作品を検討してみたい。

「雪女」にみるアンデルセンの影響

那須野絢子(常葉大学 外国語学部英米語助教)

『怪談』(*Kwaidan*,1904)は、ラフカディオ・ハーン(1890-1904)が生前手に取ることできた最後の著作である。心臓発作によるハーンの死は、一般的に急逝と捉えられている。しかし、ハーンは早い時点で寿命を自覚していた節があり、晩年は残された時間の中で、自身の文学を完成させるための執筆活動に心血を注いだ。そうして出来上がった作品群は、日本で彼の名を有名にした『怪談』として結実した。この著作がハーン文学の最高峰と称される所以は、多くの先行研究においてすでに論じられているが、この作品の持つ特筆すべき意義は、来日直後、ハーンによって取材された文学的素材が、14年間の日本での生活の中で昇華された結果として生み出されたものであることではないだろうか。本発表では、このことを証明する一事例として、同著に録作された「雪女」についての考察を紹介する。

ハーンが雪女の存在を知ったのは来日まもなく赴任した松江でのことである。その時の様子は、来日後第一著作『日本瞥見記』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*,1893)の中で発表された「幽霊と化け物」(“Of Ghosts and Goblins”)において紹介されている。つまり、ハーンは、怪談「雪女」を書き上げる何年も前に、すでに雪女を登場させた作品を発表しているのである。同じ雪女を扱っていても、民俗学的な視点で語られた「幽霊と化け物」と、物語の形態を持つ怪談「雪女」とでは作品の赴きが大分異なる。いずれにせよハーンは、松江を去り、熊本へ赴いた後も、チェンバレンへの書簡の中で雪女について言及するほど、強くこの妖怪の存在に惹かれていたのである。

出雲の怪異として伝え聞いた雪女の存在が、文学作品のヒロインへと変貌を遂げるに至るまでに、ハーンの中で一体どのような雪女革命が起こったのか。それは一括りにして語ることはできず、すでに先行研究において指摘されている影響論なども含め、様々な因子が織り成して達成されたものと思われる。本発表では、その因子の一つとして、アンデルセン作品の「雪の女王」「氷姫」「人魚姫」が、ハーンの「雪女」執筆に与えた影響を指摘する。また、論の紹介にあたり、これまでの先行研究で示されたゴーチェ、ボードレールとの影響論を引き合いに出しながら、これらフランス文学が、アンデルセン作品と雪女を結ぶ橋渡しにとなった可能性もあることも指摘する。

## 研究発表

教室4(C107教室) 第1部 14:00~15:30

現代小説における女性の老い:英語圏文学と日本文学を比較して

原田寛子(福岡工業大学教授)

本発表では、英語圏文学と日本文学における現代小説に描かれる女性の老いについて比較し、異なる文化圏に見られる女性の老いの諸相を考察する。高齢化社会を迎え、誰にでも訪れる老いに対しては偏りのない理解が求められるなかで、ジェンダーや人種の問題に比べて老いに関しては理論化が遅れていると言われる。さらに女性は、老いることによって男性に比べ否定的な要素が付加されることが多く、二重の差別を受ける対象ともなりうる。このようななかで、女性の老い、高齢女性のあり方について考察することは重要であり、また一つの文化圏にとどまらず、グローバルな視点において老いを考えることは意義深いことである。

本発表においては、英語圏文学から日系カナダ人作家ヒロミ・ゴトー(Hiromi Goto)の『コーラス・オブ・マッシュルーム』(*Chorus of Mushrooms*, 1994)を、日本文学においては梨木香歩の『西の魔女が死んだ』(1994)と小川洋子の『貴婦人Aの蘇生』(2002)を取り上げる。三作品に共通して言える点は、老女が重要な登場人物の一人として描かれていること、老女と孫娘などの若い女性との関わりが描かれていることである。また、老女と孫娘などとの間には、年齢の差だけでなく文化的背景の相違もある。『コーラス・オブ・マッシュルーム』では、日本人の歴史・文化背景を持ちながらカナダに暮らす祖母とカナダで生まれ育った日系カナダ人の孫娘が登場する。『西の魔女が死んだ』と『貴婦人Aの蘇生』では、日本で生まれ育った若い女性と西洋文化を背景に持つ高齢女性・祖母との関わりが描かれる。

異なる文化的背景を持った高齢女性の存在が、どのように若い女性の主体形成に影響を与えているのか、それらが異なる文化圏の作品においてどのような共通点と相違点のもとで描かれているのかを考察する。さらには、これらの作品において高齢の女性に付される典型的な老女のイメージから離れて、どのような新しい女性の老いの姿を提示しているかを、英語圏文学と日本文学という異なる文化圏の作品を通じて分析し、グローバルな視点から現代の女性の老いの可能性と多様性を明らかにしたい。

横溝正史「面影双紙」論(その2)

黄如萍(台湾・国立高雄餐旅大學応用日語学科准教授)

横溝正史「面影双紙」は、昭和8(1933)年に雑誌『新青年』1月号で発表された小説である。

本作は、これまでの研究史において、さほど多くの注目を集めてきたものとはいえないが、その数少ない研究においては主に、他作品との関連を中心に論じられてきた。具体的には、江戸川乱歩が「一般文壇と探偵小説」(『宝石』昭和22年5月号)において、「横溝君なども谷崎文学の心酔者であって、例えば、「鬼火」と「金と銀」、「面影双紙」と「ある少年の恐れ」、「蔵の中」と「呪はれた戯曲」等、その着想が酷似しているほどある」と谷崎潤一郎作品との類縁性を指摘しているのが代表的である。

本作品の従来の研究史では、こうした指摘をもとに、横溝正史と谷崎潤一郎との関係が論じられてきたものと考えられる。ただ、横溝正史の創作において、谷崎潤一郎の作品を意識しているのは間違いないと思う一方、なぜ、あえて谷崎潤一郎の作品でなければいけないのかといった点は気がかりである。つまり、横溝正史の創作における谷崎潤一郎作品からの摂取といった問題は、いまだに考察の余地は大きいと考えるのである。こうした点を踏まえ、昨年の大会では、「横溝正史「面影双紙」(その1)」として、横溝正史の「面影双紙」という小説を、全体の構造や仕組みといった面から検討し、一定の成果を得たものと考えた。そして、本論では、本作品の仕組みを捉え直すことを試みるべく、「私」による語りの構造に着目し、他作品との関係性や、そこから摂取した主題に注目して読み解いていきたいと思う次第で、論証方法として、同様の性格を持つ他作品と共通した要素を探りつつ、横溝正史における「面影双紙」の文学的位置を検討するものとする。

「八月の庵一僕の「方丈記」体験」と『風の歌を聴け』から見た文学の原点

—AI技術と協働し村上春樹文学研究の体系化を目指して—

曾秋桂(淡江大学教授)

随筆『猫を棄てる父親について語るとき』(2020.文藝春秋)は、村上春樹作品の原風景がここにあると言われている。この随筆では、村上春樹が初めて積極的に父親との日常的出来事を語り始めた。そうすると、小説家としてデビューした時期と前後に、小さい頃、夏に国語教師の父親によく琵琶湖の近くにある松尾芭蕉の「幻住庵」で開いた句会に連れてもらった体験を書いたエッセイ「八月の庵一僕の「方丈記」体験」(1981)もあることを忘れてはならない。

「八月の庵一僕の「方丈記」体験」では、村上春樹が「ひとつの生が存在し、その生を断ち切った死が存在した。しかしその死は瞬間的なものではなく、生が終息した後もひとつの状況として」<sup>1</sup>と「存続する死」の考え方に触れている。翌年に発表した短編小説『螢』(1982)には、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と続けられている。この有名なセリフも『ノルウェイの森』(1987)にそのまま援用されている。実は、処女作『風の歌を聴け』(1979)にも数多くの死の形が描かれている。このように、エッセイ「八月の庵一僕の「方丈記」体験」と処女作『風の歌を聴け』(1979)から見た死生観が村上春樹文学の原点として考えてもよかろう。

他方、発表者が今まで AI 技術と協働し、村上春樹文学研究を積み重ねてきた。今回もその一端として、「八月の庵一僕の「方丈記」体験」と『風の歌を聴け』における死生観を対照、比較し、村上春樹文学の原点を探る。次に、AI技術データマイニングを応用し、両作品を解析する。最後に、AI技術データマイニングと従来の文学研究のテキスト分析結果を総合的に照合し、浮かび上がってきた潜在的テーマを村上春樹文学の原点に結び付けて考えてみたい。

このように、AI技術と協働して、村上春樹文学研究の体系化を目指している所存である。

キーワード

「八月の庵一僕の「方丈記」体験」 『風の歌を聴け』 村上春樹文学 原点 AI技術

---

<sup>1</sup> 村上春樹(1981)「八月の庵一僕の「方丈記」体験」『太陽』 p. 9

村上春樹『一人称単数』に描かれた過去と未来

葉凌(淡江大学准教授)

村上春樹の『一人称単数』(2020年・文藝春秋)は、『文學界』2018年7月号、『文學界』2019年8月号、『文學界』2019年12月号、『文學界』2020年2月号に連載された7つの短編と書き下ろしの「一人称単数」を収録した短編小説集である。

短編小説の創作について、村上春樹は『女のいない男たち』(2014年・文藝春秋)の「まえがき」に「特定のテーマなりモチーフを設定し(中略)『神の子どもたちはみな踊る』の場合のモチーフは『一九九五年の神戸の震災』だったし、『東京奇譚集』の場合は『都市生活者を巡る怪異譚』だった。(中略)本書のモチーフはタイトルどおり『女のいない男たち』だ」と説明している。そうしたら、『一人称単数』の「特定のテーマ」は題名通りの「一人称」だと考えられよう。また、「八つの短編は、それぞれ意識的・意図的に作家村上春樹の事実と戦略的に重ねられて一見私小説風に仕立てあげられています」と論じられるように、「一人称=作者・村上春樹」という私小説的な構図は用意されている。

作中に文学部、浪人、音楽、中華料理に苦手など作者である村上春樹の人生と重なった設定は多く見られる。村上春樹の過去を織り込むという設定は『一人称単数』を論じ際に無視できない要素だと思われる。一方、「あんたがそのレコードをいつか入れたら、私にもぜひ聴かせてもらいたいものだね」、「マルタ・アルゲリッチの演奏する『謝肉祭』をいつか聞きたい」、「僕自身もいつかそれを試してみることになるかもしれない」とあるように、「いつか」という不確かな将来に対する願望は書かれている。本稿では、作者・村上春樹を想起させる諸要素に注目し、各短編の語り手と照らし合わせて『一人称単数』における「過去」を探る。そして、「過去」を継承した語り手が向かう「未来」の可能性を明らかにしたい。

---

<sup>1</sup> 村上春樹(2014)「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋P.6

<sup>2</sup> 田中実(2021)「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語—〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる 父親について語るとき』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『あるひあるとき』—」『都留文科大学大学院紀要』(25)都留文科大学P.12

## 研究発表

教室4(C107教室) 第2部 15:40~17:40

『<sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」を聴く女たち』の女性像 ——マルカム・ラウリーの作品との比較を通して——

風早悟史(山口東京理科大学講師)

本発表では、大江健三郎の連作短編集『<sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」を聴く女たち』(1982)の中から、表題作『<sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」を聴く女たち』と『さかさまに立つ<sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」』を主に取り上げ、そこで提示されている女性像について、作中でしばしば言及される英国人小説家マルカム・ラウリー(Malcolm Lowry)の作品または伝記的事実との比較を通して考察する。

上記二作は、語り手の「僕」がハワイ大学東西文化センター主催のセミナーに参加するためにハワイに滞在していた際に再会した旧友高安カッチャンとその妻である中国系アメリカ人ペニーとの交流を書いている。高安カッチャンは、アルコール依存症によって心身をほろぼしつつあり、壮大な小説の構想を持ちながらもそれを完成させることができずにいる。ペニーは、夫から時に乱暴な扱いを受けながらも、その天才を信じ、彼が死ぬまで寄り添い続ける。

高安カッチャンとペニーの関係性は、ハワイ大学でラウリーの研究をしているペニー自身も述べているとおり、ラウリーと妻マージェリーのそれと重なっている。ラウリーもまた自己を破壊するかのように酒を飲み続けた作家であり、マージェリーは共同執筆者のような存在として公私にわたって夫を支え続けた。ラウリーの代表作である『火山の下』(*Under the Volcano*, 1947)の主人公ジェフリー・ファーミンは、メキシコの英国領事であるが、作者と同じくアルコール依存症であり、妻のイヴォンヌが一度はメキシコを離れるものの、夫を救うために戻ってくる。『火山の下』に比べると有名ではないが、同じく作品中で重要な物語として引用されている中編小説『泉への森の道』("The Forest Path to the Spring," 1961)に登場する語り手の妻は、生命力の象徴そのもののように描かれる。

『<sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」を聴く女たち』には、ペニー以上に男性の陰惨な暴力の対象とされる女性も登場する。本作が示す複雑な女性像を明らかにする上で、マルカム・ラウリーの作品との比較は重要な作業であるといえる。

## 研究発表

教室5(C105教室) 第1部 14:00～15:30

### 異文化コミュニケーション能力の向上を目指した英語教育の実践

～知識・技能を活用して「話す力」につなぐ～

山崎祐一(長崎県立大学教授)

本研究の主たる目的は、英語学習者の英語に関する学力や英語コミュニケーション能力を図るために、英語資格試験の成績だけにその判断基準を求める傾向にある中、大学と地域が連携し、教室で培われた英語学習者の英語の知識及び技能を「話す力」に活用できる英語運用能力や異文化コミュニケーション能力育成のための教育プログラムを構築し、英語学習者がこのプログラムに定期的に参加することによって、異文化コミュニケーション能力がどのように変容するかについて追究し、この教育プログラムの有効性を検証することである。具体的には、アメリカ文化が日常的に混在する長崎県佐世保市で小学校から大学までの英語学習者が、異文化理解を伴うプログラムに継続的に関わることで、英語学習や異文化理解学習に対する動機付けやさらなる学習意欲の向上、また、英語での発信・対応能力にどのような効果をもたらすかを検証する。佐世保市にはアメリカンスクール3校(小学校2校、中高一貫校が1校)があり、児童生徒たちは日本語・日本文化を必修科目として学んでいる。日米の外国語学習者たちが、お互いの学校を相互訪問し、地域における異文化交流を通じたコミュニケーション活動に取り組んでいる。お互いに見るもの全てが新鮮で、新たな発見がある。異文化コミュニケーション能力の向上には、このような発見学習や課題解決型学習が非常に重要で、文部科学省が目指す「主体的・対話的で深い学び」にもつながっていくと考えられる。活動終了後にフィードバックとして得られる英語学習者の意見を参考に、「英語を使って何ができるようになるか」ということを視野に入れた英語教育や、地域における異文化コミュニケーションのさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法について検討する。そうすることによって、本研究の成果を地域社会の国際親善や異文化共生の促進にも役立てる。

本発表では、昨年度、長崎県と佐世保市両教育委員会、及び佐世保市内の小中高とアメリカンスクールの連携を通して、異文化理解を取り入れながら「話す力」の向上を目的の一つに実践した取組について報告する。

## 研究発表

教室5(C105教室) 第1部 14:00~15:30

英語力測定テストとして活用する映画:mMET『レベッカ』バージョンを例に

飯田泰弘(岐阜大学准教授)

本発表では、牧ほか (2003) による最小英語テスト (Minimal English Test (MET)) を基盤とし、映画音声を用いた Movie-MET (mMET) が開発可能かを検証するため、映画『レベッカ』(Rebecca, 1940) の会話を用いて行った実験の結果を報告する。

牧ほか (2003) は、約 5 分の英語音声聞きながら、A4 用紙 1 枚の空所に英単語を埋めるだけで、センター試験や TOEIC の得点が予測できる MET を作成した。しかし、MET や、日本の英語科教育で使用される英語音声の多くは、英語母語話者が静寂の中で、流ちょうに読み上げるものが多い。一方で実社会では、周囲の雑音があったり、話者が言い淀んだり、さまざまな状況下で英語を聞き取る能力が求められる。そのため、今後も「聞きやすい音声」のみで、日本の英語学習者の英語力育成や、英語力の測定をし続けることには疑問が残る。

本研究では、より実践的な英語能力やコミュニケーション能力を育成し、学習者の英語力を測るためには、① 2 名以上の会話、②周囲の雑音などが適度に入る、③会話のテンポが一定ではない、という特徴を持つ音声の使用が重要だと考える。これを踏まえ本調査では、「mMET 得点と、大学入学共通テスト/TOEIC 得点との間に、統計的有意な相関があるはずだ」という仮説を立て、その証明のために、映画『レベッカ』の会話音声を用いた実験を行った。具体的には、『レベッカ』内の会話で、mMET 01(男性 1 名&女性 1 名の会話、3 分 47 秒)と、mMET 02(男性 1 名&女性 2 名の会話、3 分 02 秒)を作成し、2022 年度前学期に大学 1 年生に調査を実施した。すると単回帰分析の結果、2 種類の mMET 得点と、大学入学共通テスト/TOEIC 得点との間に、(1)に示されるように、統計的有意な相関があることが判明した。

### (1) mMET 01/02 の得点と、大学入学共通テスト/TOEIC 得点との相関

	大学入学共通テスト		TOEIC	
	mMET 01	mMET 02	mMET 01	mMET 02
<i>n</i>	22	22	20	20
<i>r</i>	.49*	.45*	.67*	.53*

\* $p < .01$

重要点は、上記 mMET なら約 3 分という短時間で、他の信頼できる英語総合テストの得点がある程度予測できたことである。また、英語教材として映画を使用することは、学習者の学習動機を高める効果があるという報告は少なくない(近藤 2018 など)。以上を踏まえ、mMET は今後、日本の幅広い英語学習者に対して、多種多様な目的で使える有効なテストになりうる点を議論する。

参考文献 [1] 近藤暁子. 2018.「映画を使用した指導による日本人大学生の英語学習に関わる動機づけへの影響」、『映像メディア英語教育研究』23. 17-30. [2] 牧秀樹・和佐田裕昭・橋本永貢子. 2003.「最小英語テスト: 初期研究」、『英語教育』53 (10), 47-50.

日本人英語学習者の文産出における日本語の主題をもつ文の影響に関する一考察

—初級学習者・中級学習者の和文英訳のデータの比較を通して—

橋尾晋平(名古屋外国語大学専任講師)

日本人英語学習者の母語である日本語は、彼らのスピーキングやライティングに影響を与えることがあり、このことを転移(transfer)と呼ぶ。習熟度の低い外国語・第二言語の学習者は、目標言語の知識が不足するため、母語の知識にアクセスしながら文産出を行う。したがって、彼らは母語と目標言語における特定項目が似ていると判断し、転移が生じるとされる。一方、習熟度が上がると、非典型的な用法は転移できないと保守的な判断する可能性も高まり、転移は少なくなるが、かえって誤用が増える可能性がある。また、過剰一般化(overgeneralization)は習熟度が上がっても消えにくいとも指摘している。

英語は「主語＋述語」の構造をとるのに対し、日本語は「主題＋解説」構造をとるため、日本語の主題と英語の主語は、日本人英語学習者の間でしばしば混同され、転移が生じる。日本語の主題をもつ文の特徴として、(i) 主題となる名詞句は文頭に置かれる・(ii) 主題は提題助詞「は」にマークされる・(iii) 空主語が認められる・(iv) 二重主語構造をとる場合がある・(v) 述語が代用化される場合があるという5つの特徴があり、これらの特徴が日本人英語学習者の文産出に負の影響を与えようと考えられる。

本発表では、日本人初級学習者・中級学習者の学習者言語の分析を行い、上記の(i)～(v)のどの特徴が文産出に影響を与えるのかを検討する。日本人初級学習者の大学生70名と中級学習者の大学生61名を協力者とし、和文英訳の調査を行った協力者に対して配布した調査票は、30問の和文英訳問題から構成されており、すべて主題をもつ文であり、「主語以外の名詞句の主題」・「『は』のマーク」・「空主語」・「二重主語」・「述語代用」の特徴を含んでいる。回収したテストは、構文的に正しい英文が産出できるかをチェックし、正誤をまとめたデータを用いて、初級学習者のデータと中級学習者のデータとの比較を行う。本発表では、各問題の正解者数を目的変数とし、「主題の特徴」・「空主語の有無」・「述語代用の有無」を説明変数とする重回帰分析を習熟度別に行う。「主題の特徴」については、二重主語構造をとる文かどうかの分類を行い、二重主語構造をとらない文は、日本語の主題と英語で表現する際に想定される主語が一致するかどうかの分類を行っている。

その結果、初級学習者は、日本語の主題と英語の主語が一致しない文、二重主語構造をとる文、述語が代用化された文の英訳が困難であると判明し、日本語の主題をもつ文の特徴である(i)・(iv)・(v)が彼らの文産出に影響を与えると示された。一方、中級学習者の結果と比較すると、習熟度が上がるにつれ、(i)や(iv)の特徴が反映された文を英語で表現することが容易となり、転移は減少するということが示された。しかし、(v)の特徴が反映された文では、正解者数が少なくなる傾向が強いことが導かれたため、中級英語学習者の文産出であっても、述語の代用化は、誤りを誘発する因子となりえろと結論づけた。

項と付加詞における照応形の局所性について

福嶋剛司(北洋大学専任講師)

本発表では、Chomsky (2013; 2015)、Saito (2017) の枠組みおよび Chomsky (2004) の仮定する付加詞における仮定 SIMPL に基づき、英語やフランス語における照応形束縛現象ならびに付加詞である遊離数量詞: FQ がそれぞれ異なる局所性で束縛されることを示す。

まず照応形束縛とは(1)のように定節においては同一節内でのみ同一指示が可能であるが、(2)のように照応形が不定節内にある場合、主節まで同一指示に取ることが可能になる。

(1) a. \*John<sub>i</sub> believes [that himself<sub>i</sub> is smart] / b. [John<sub>i</sub> believes himself<sub>i</sub> to be smart]

(2) a. John<sub>i</sub> prefers [for himself<sub>i</sub> to be nominated] / b. They<sub>i</sub> want [to visit [each other]<sub>j</sub>]

上記のように項における束縛の局所性は節との一致関係に影響する。それに対し通常 FQ が生じる(3)では<>で示す述語の前部までの箇所ではしか局所関係を結ぶことができない。( <> は all が生起可能な位置を示す)

(3) The children<sub>i</sub> <all<sub>i</sub>> might <all<sub>i</sub>> have <all<sub>i</sub>> been <all<sub>i</sub>> shouting \* <all<sub>i</sub>> at once \* <all<sub>i</sub>>.

しかし不定詞節を補部を取る(4a-e)の場合、埋め込み節に FQ が生じることは可能であるが (2)と違い動詞によって束縛の適用範囲に違いが生じることが知られている。特に主語コントロール(4a,b)・目的語コントロール(4c)の違いによって適格差が生じることからわかるように、表面的な語順の近さでは、この束縛関係を適用できる範囲を説明できない。

(4) a. \*Frank promised the men<sub>i</sub> all<sub>i</sub> to leave (Maling 1976 slightly modified)

b. The men<sub>i</sub> promised me to all<sub>i</sub> resign (Baltin 1995 slightly modified)

c. I persuaded the men<sub>i</sub> <all<sub>i</sub>> to <all<sub>i</sub>> resign (ibid.)

d. The students<sub>i</sub> seemed <all<sub>i</sub>> to <all<sub>i</sub>> know French

e. Who<sub>i</sub> seems all<sub>i</sub> to have won the lotto? (Fitzpatrick 2006 slightly modified)

以上のことに対し、本発表では統語構造上で項はラベル付けに関与し意味解釈部門(C-I インターフェイス)に転送されるのに対し、付加詞 FQ はラベル付けに関与せず転送される直前に SIMPL が適用されることで適格性が判断される。これにより項と付加詞における異なる局所性が説明できることを示す。

<参考文献> Baltin, Mark R (1995) Floating Quantifiers, PRO, and Predication. *Linguistic Inquiry* 26: 199–248. / Chomsky, Noam (2004) Beyond Explanatory Adequacy. In *Structures and Beyond. The cartography of syntactic structures, Volume 3*, ed. Adriana Belletti, 104–131. Oxford: Oxford University Press. / Chomsky, Noam (2013) Problems of projection. *Lingua* 130: 33–49. / Chomsky, Noam (2015) Problems of projection: Extensions. In *Structures, Strategies and Beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, ed. Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 1–16. Amsterdam: John Benjamins. / Fitzpatrick, Justin Michael (2006) The syntactic and semantic roots of floating quantification. Doctoral dissertation, MIT. / Maling, Joan M (1976) Notes on Quantifier-Postposing. *Linguistic Inquiry* 7: 708–718. / Saito, Mamoru (2017) Notes on the Locality of Anaphor Binding and A-Movement. *English Linguistics* 34: 1–33.

オランダにおける複言語・複文化主義と言語教育

—英語教育の現状と課題を中心に—

高坂京子(立命館大学教授)

本発表は、オランダにおける複言語・複文化主義に基づいた言語教育のあり方に焦点を当て、とりわけ小学校から大学に至るまでの英語教育の現状と課題を分析することにより、オランダの言語教育の特徴を考察するとともに、日本の英語教育に資する点を探究するものである。

オランダは日本の九州ほどの大きさの国であるが、英語教育に力を入れており、「EF 英語能力指数」においては、世界 111 の国・地域から 210 万人が参加した 2022 年を含め、4 年連続 1 位を獲得している。また、TOEFL iBT の国別スコアランキングでは常に 1~3 位を占め、ユニセフ報告書の「子どもの幸福度の総合順位表」においても何度も 1 位を獲得してきた。このように英語力でも子どもの幸福度の点でも高く評価されている国であるが、その背後にはそれを支える教育政策や教育環境が存在する。オランダでは、(i) 学校設立の自由、(ii) 教育理念の自由、(iii) 教育編成(方法)の自由、が憲法で保証され、オランダの公教育は世界で最も自由裁量権が認められた制度の一つと言われている。各学校には大きな裁量を与えられ、学校ごとに多様な教育を実施し(「教育の自由」、教育の質が担保できるように国と現場をつなぐ専門機関である「教育監督局」が監査を行なう仕組みとなっている。また、私立学校に対しても公立学校と同一の公費助成が保証され(「財政平等の原則」、保護者は公立、私立を問わず、任意の学校に入学希望を提出することができる(「学校選択の自由」)。こうした教育政策は、オランダの多様な言語的・文化的背景のなかで培われた複言語・主義と密接に関連している。とりわけ 2001 年に欧州連合(EU)が加盟国の言語学習と相互理解を促進する目的で「欧州言語年 2001」を実施して以来、「母語+EU の2カ国語」の学習が推奨され、言語教育の共通基準としての「欧州共通参照枠(CEFR)」も広く用いられるようになり、複言語・複文化主義に基づいた言語教育が大きく前進した。

そうした中、オランダは英語教育についてもさらなる改革を進め、小学校の早い段階から実施するのみならず、英語とオランダ語の両方でバイリンガル授業を行なう取り組みをスタートさせた。2014~2023 年には 19 の小学校がパイロットスクールとして認定されている。また、中等教育においては 120 の学校(約 5 校に 1 校)がバイリンガル・ストリームを設置し、約 30,000 人の中学生・高校生がそこで教育を受けている。英語はオランダ語と系統的に近く、習得に有利とはいえ、英語力の高さがこのような地道な教育政策に支えられていることは注目すべきである。

本発表においては、上記のようなオランダの言語教育の特徴を主に複言語・複文化主義の観点から考察し、発表者が行なった現地調査を踏まえて英語教育の現状と課題を分析する。そして、そこから日本が何を学べるのかを比較文化の視点を交えながら示唆したい。

## 代名詞回避原理における対格と属格の適格性について

大井一真 (京都外国語大学大学院)

英語などの自然言語には(1a)のように音形をもたず、発音されない非顕在的代名詞 PRO を用いることがある。これは先行詞である名詞句と同一指示となる場合に用いられる。それに対し英語において顕在的な代名詞は状況によって指示するものに相違があることが知られている。例えば(1a)の him は主語とは異なる指示で、(1b, c)の he と her は主語(John, Mary) と同一の対象を指すなど状況によって指せるものに違いがあることが知られている。

- (1) a. I<sub>1</sub> want {PRO<sub>1</sub>/him\*<sub>1/2</sub>} to buy the book  
 b. John<sub>1</sub> think that he<sub>1/2</sub> is genius  
 c. Mary<sub>1</sub> washed her<sub>1/2</sub> hands

こういった代名詞の性質は(2)においてもみられる。remember などの動詞の後に動名詞句が生起する場合に、動名詞の意味上の主語として、(i) PRO (ii) 属格 his (iii) 対格 him の3通りが可能である。しかし、これら3つは主語 John との同一指示性の適格性に関して相違がある。(i) PRO の場合は John と同一指示が可能である。(ii) his の場合は John と強い非同指示がある。(iii) 対格 him の場合は John と非同指示である。このように、顕在的な代名詞と PRO の両方が生起可能な場合に、先行詞と同一指示を指す場合は PRO を用いる。このことを、Chomsky(1981)では代名詞回避原理と呼ぶ。この原理は一般に文体規則であり、言語運用上の問題だと考えられている。

- (2) John<sub>1</sub> remembered {PRO/<sup>?</sup>his/\*him}<sub>1</sub> talking to Mary

(2)の同一指示に関する言語事実に対し、本発表では Postal(1974)が仮定する(3)のような例に基づいて説明できることを示す。Postal(1974)は(3)において名詞句 Bob は補文主語位置である下線部から、主文の目的語位置まで移動すると分析している。その根拠として recently が介在することによって Bob は補文主語位置ではなく主文目的語位置であると考えられるため、補文主語である Bob は主文目的語位置まで移動していると考ええる。

- (3) I have found Bob recently            to be morose (Postal 1974: 146 一部改変)

本発表では、Chomsky (2013; 2015)による標示付けアルゴリズム(Labelling Algorithm)と Postal(1974)による(3)の分析を用いることで、文体規則であるとされている代名詞回避原理における him と his の適格性の相違の説明を試みる。

[参考文献] Chomsky, Noam., (1981), *Lectures on Government and Binding*, Foris. / Chomsky, Noam (2013) Problems of projection. *Lingua* 130: 33–49. / Chomsky, Noam (2015) Problems of Projection: Extensions. In *Structures, Strategies and Beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, ed. Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 1–16. Amsterdam: John Benjamins. / Postal, Paul (1974) *On Raising*, Cambridge, Mass.: MIT Press. / 斎藤衛 (2020)「原理群による規則の説明から原理群の説明へ—ラベル付け理論を巡って—」*Energieia* 45, 13-37.

メディアを活用した課題解決型プロジェクトによる地域活性化の可能性

——文化力とプロデュース力の向上を目指した取り組み

関口英里(同志社女子大学 学芸学部メディア創造学科教授)

地域社会との連携で実践的に学びながら社会貢献を目指す、学生主体のプロジェクト型教育の実践と成果について提示し、その可能性について検討を行う。大学の所在地である京田辺市は、時流と社会状況の変化に伴い、地域の産業や伝統文化が様々な課題に直面している。そこで学生主体のプロジェクトチームを立ち上げ、地域の方々とのコラボレーションによりユニークな解決策を考案し、新たなプロモーション活動を行った。メディア創造学科ならではの知識や技能を活かした企画を通してコミュニティに貢献し、地元文化の魅力再構築や産業活性化の一助となる。そうした活動で、グローバルに活躍できる人材の育成の推進は、大学が現代社会に求められている教育目標を実現するものでもある。昨年度は歴史文化を担う地場産品の理解向上と消費促進を主題とし、オンライン時代のリアルな学びを念頭に地元密着型の活動を推進した。1年に及ぶ精力的活動と地元産業との協働作業の結果、メディアを駆使したコンテンツ提供と新機軸の商品プロデュースで、地域文化と特産品の魅力をPRし、地域活性化と教育効果の実現という目標が達成できた。

今回は京田辺ゆかりの「一休納豆」に着目し、その歴史的・文化的背景や保存食・日常食としての価値を改めて学び、市民の認識や消費の現状と課題についてリサーチを行った。その結果、様々な解決すべき問題点を発見するとともに、その改善に向けた独自施策を考案するに至った。まずは認知度、消費量ともに低迷している現状の打開が必須と捉え、消費者の知識充実と使用方法の多角化をはかり、サステイナブルやエコロジー、ヘルシーといったキーワードを基に、若い世代にも親しみやすいレシピの考案とオンラインでの提供を行った。さらには限定された作り手の高齢化による生産力および販売力の制約という問題解決のため、パッケージング、販売形式、PR、流通システムの再構築を試みた。また地域の市民祭に参画し、市民と触れ合いながら販売やプロモーション、実証実験やイベントを通したリサーチ活動を行った。SNSを活用したオンラインでの情報発信とコミュニケーションの実践も成果を挙げ、最終的にはコンテンツをデジタル化して広く提供することで、地域産業の継続的な発展と伝統文化の継承に資することができた。この積極的かつ独創的な地域への貢献活動が認められ、NPO 法人アントレプレナーシップ開発センター主催の全国大会「ユースエンタープライズトレードフェア 2022」において、各界有識者の外部評価に基づく特別賞を獲得したことも本企画の成果と可能性を示す根拠であると考えている。

地域社会と産業振興に関わる密着型の教育活動が鈍化しがちな近年において、メディアを駆使した技法と直接的交流を融合できた意義は大きく、受講者への事後調査からもプロデュース力や人的成長の事実を把握することができた。今後も新たな課題解決を目指して地域と連携し、さらなる社会的ベネフィットをもたらすべく、活動を継続してゆきたい。

ダイバーシティ経営の推進と課題

—外国人雇用の実態調査からみる一考察—

郭潔蓉(東京未来大学教授)

グローバル化の深化と少子高齢化による労働力不足が契機となって、日本における外国人労働者の雇用は増加の一途を辿っている。コロナウィルスの感染拡大が始まった2020年から2021年にかけては勢いが幾分か鈍化したが、パンデミックによる人流の諸制限がある中でも、その増加傾向が止まなかったことは特筆すべきである。外国人労働者の需要が増加する傾向のなかで、日本政府も平成27年より「競争戦略としてのダイバーシティ経営(ダイバーシティ 2.0)の在り方に関する検討会」を開催し、ダイバーシティ経営を「多様な人材を活かし、その能力<sup>2</sup>が最大限発揮できる機会を提供することで、イノベーションを生み出し、価値創造につなげている経営<sup>3</sup>」と定義し、推進を実施している。

しかし、企業は果たして組織として「多様性」を受け入れ、ダイバーシティ経営を推進してきたと言えるだろうか。また、現場で外国人労働者と働く日本人職員は、異文化をバックグラウンドにもつ外国人労働者に対し、どのような意識をもって協働し、どのような課題を抱えているのだろうか。その実態がみえない中では、ダイバーシティ経営の目指すイノベーションの産出や価値創造が経済産業省の狙い通りに達成できるのか、大きな疑問が残る。

そこで、本研究では意識調査を通して、労働現場における多様性の受容の実態を明らかにし、外国人労働者との協働に対し、日本人労働者がどのような意識をもっているのかを考究することとした。意識調査は、全国の22歳~60歳の男女を対象に二段階で実施した。第一段階では10,000人を対象にスクリーニング調査(2023年3月2日)を行い、第二段階では第一段階で得られたモニターを3グループに分けて本調査(2023年3月3日~6日)を実施した。本調査における調査項目は、馬越(2008)提唱する「異文化経営の要諦<sup>4</sup>」をもとに「多様性の受け入れ」「動機と意欲、モチベーション」「知識や情報」の三項目で策定し、得られた回答よりそれぞれの項目の関連性について分析を行った。

本発表では、以上の研究調査から得られた知見をもとに、労働の現場における外国人労働者の雇用実態と課題を明らかにするとともに、企業(組織)における多様性の受容とダイバーシティ経営の推進についての一考察を提示したい。

<sup>1</sup> 「多様な人材」とは、性別・年齢・国籍・障がいの有無などだけではなく、キャリアや働き方などの多様性も含む。(2016 経済産業省)

<sup>2</sup> 「能力」とは、多様な人材それぞれの持つ潜在的な能力や特性なども含む。(経済産業省)

<sup>3</sup> 「Best Practices Collection 2016」(2016 経済産業省)より引用

<sup>4</sup> 馬越恵美子(2008)「異文化経営とダイバーシティ・マネジメント」経営学論集 78 (0), 75-86, 日本経営学会

## 研究発表

教室6(C204教室) 第1部 14:00~15:30

### 岐阜県可児市国際交流協会フレビアの取り組みの変化

田中真奈美(東京未来大学 モチベーション行動科学部教授)

#### はじめに

日本に在住する外国人の増加と長期化・定住化に伴い、日本生まれの二世や三世が誕生し、外国人やその子ども達への支援の在り方が変化してきており、新たな支援の必要性も明らかになりつつある。本研究では、外国人の集住地区で様々な取り組みや活動を行っている岐阜県可児市の国際交流協会フレビアの活動実践から、支援や活動がどのように変化してきているのかを明らかにした。

#### 方法

**調査対象者・手続き** 支援や活動の変化を調査するため、外国人の集住地区である岐阜県可児市を調査対象地とし、国際交流活動団体の活動内容と団体の責任者である事務局長を調査対象者とした。2008年4月にオープンした可児市多文化共生センター・フレビアは、1) 情報的今日、2) 日本語学習支援、3) 外国人相談窓口、4) 交流の場の4つの機能を柱として、多文化共生を推進しているセンターである。

岐阜県可児市の可児市多文化共生センター・フレビアで実施した研究方法は、視察および聞き取り調査である。2019年2月に初めて訪問して以来、「多文化共生フェスティバル」、「高校進学支援教室」等を、毎年視察している。2019年から2022年までの4年間で実施した視察と聞き取りから、支援の変化に着目し、分析・考察した。

#### 結果・考察

4年間の視察の比較から、次の2点の変化が確認できた。

##### 1) 外国ルーツのコーディネーター

2021年10月に「高校進学支援教室」を視察した時、コーディネーター佐藤さん(仮名)は、自身も可児市多文化共生センター・フレビアで支援を受けていた外国ルーツの人であった。中学生の時に来日し、日本語を猛勉強し、習得した。外国人で大学へ進学する人が少ない状況の中で、日本で生きていくために教育が必要と考え、大学へ進学した。自身の経験を支援教室に通う中学生のために活かしたいと話していた。事務局長によると、佐藤さんがコーディネーターになってから、サポートが手厚くなり、途中でドロップアウトする受講生が減ったそうである。

##### 2) JICA 日系社会研修員の受入れ

コロナ禍で来日できなかった研修員は、2022年に来日することができ、日系サポーターとして活躍していた。研修員が中心となって、「多文化共生フェスティバル in 2022」を企画し、以前の視察にはなかったイベント等もあり、皆が楽しめるイベントとなっていた。

フレビアでは、支援や活動の開始から30年以上が経ち、外国語の堪能な日本人スタッフも増加し、併せて、外国ルーツの人々が支援者になりつつあることがわかった。

不妊治療と仕事の両立支援を促す組織文化に関する研究

宮辻渉(広島経済大学准教授)

近年、日本は晩婚が進み、それにともなって約 40 年の間に第一子を出産する女性の平均年齢が 5 歳上がっている(内閣府, 2017)。それゆえ、第 2 子の出産時点で高齢出産になるケースが多くなっている。このことは、合計特殊出生率が減少し、人口の増加や維持が困難になってしまうことを意味している。マクロ経済学的にも日本は人口オーナス期に入っており、それが経済成長に対してマイナスに影響している。

そうしたなか、日本が持続的な経済成長を実現するためには、出生数を増加させる必要がある。しかしながら、妊娠を望む夫婦の 5.4 組に 1 組が医療機関を受診している。NPO 法人 Fine (2018) の調査では、そのうちの多くの当事者が不妊治療と仕事を両立することが困難であることが示されている。それ以外にも多くの当事者が離職に至ってしまっている。その理由は、ワーク・ライフ・バランス施策としてのフレックスタイムや時短勤務といった制度の利用に心苦しさを感じたり、上司の理解が得られないというものである。したがって、こうした施策そのものを利用しやすくするような組織文化の構築が不妊治療と仕事の両立支援には欠かせない。

こうした問題意識のもと、本研究は以下の研究目的を設定する。すなわち、本研究の目的は不妊治療と仕事の両立支援を実現するための組織文化に関して先行研究と二次資料から考察をくわえ、その示唆を明らかにすることである。そのために、本研究は上司の家族支援行動(Family Supportive Supervisor Behavior)の理論から考察を進めていく(Walumbwa et al., 2008)。両立支援によって得られる示唆は次の 3 つである。第 1 にマクロレベルでは、人口の維持を実現できるとともに、当事者が会社を辞めずに済むので労働市場における労働力の担保に寄与することである。第 2 にメゾレベルでは企業側が採用や育成にかかった費用を中長期的に回収可能になることである。第 3 にミクロレベルでは、離職せずに働いていれば得られていたであろうはずの賃金が機会費用として発生することを防ぐことができるという点である。

参考文献

内閣府(2017)「少子化対策の現状」

([https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2017/29webhonpen/html/b1\\_s1-1-2.html](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w2017/29webhonpen/html/b1_s1-1-2.html): 2023 年 3 月 6 日最終閲覧)

NPO 法人 Fine (2018)『不妊白書』特定非営利活動法人 Fine(ファイン)。

Walumbwa, F. O., Avolio, B. J., Gardner, W. L., Wernsing, T. S. and Peterson, S. J. (2008) “Authentic Leadership: Development and Validation of a Theory-Based Measure,” *Journal of Management*, Vol.34 Issue1, pp.89-126.

日本と台湾における音楽と社会運動の関係性

—音楽フェスにおける NGO ヴィレッジから—

陳孟宏(国立宇都宮大学博士一年)

本稿は、台湾と日本におけるインディーズ音楽(以下、インディーズ)の変容に焦点を当て、その共通点と差異を社会運動との関係性から考察する事により、社会運動が音楽に与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、音楽フェスを通じてインディーズが社会とどのように密接な関係を結んできたかに注目して検討を加えた。

1960年代アメリカ社会は変化の時期にあり、社会運動と音楽の展開が密接に関わっていた。また、当時のインディーズ・ミュージシャンは世界的な反権力・反権威的な流れの中心で多くの音楽作品を創り出していた。これらの社会運動の流れの中で、彼らは音楽を通じて様々な社会問題を支援する事により、社会の共鳴を引き起こし、インディーズの拡張と社会運動は密接につながっていた。そのため、本稿はインディーズが社会の中でどのような役割を果たしたのかについて、日本と台湾の音楽フェスに注目し、その共通点と差異を社会運動との関係性から考察しながら説得的に論証している。

まず、インディーズが日本と台湾にそれぞれどのように移入されていたのかについて整理した。その中から、インディーズ・シーンに焦点を当てると、音楽フェスはインディーズにとって重要な自己表現の場所であることがわかった。インディーズと音楽フェスの関係を整理すると、インディーズ・ミュージシャンが音楽フェスを通じて行った社会実践がわかった。次はインディーズと社会運動の関係を明らかにするために、音楽フェスを取り上げて考察した。代表的な「フジ・ロック(日本)」と「メガポア・フェス(台湾)」を取り上げて検討した。分析したところ、社会運動やNGO団体が重要な位置を占めていることが明らかになった。特に、音楽フェスにおけるNGO ヴィレッジは、社会問題・社会運動と民衆の間をつなぐ役割を果たしていたことが分かった。

日台の参加者は、音楽フェスに現れる社会運動に対して異なる反応を示していたことがわかった。特に、台湾は政治、経済などの社会背景で長年に中国政府の影響を受けてきたため、台湾は政治に関する社会問題が多い。共通点は、環境問題に関する団体が最も多く、特に反核・原発が最も重視されている点であった。最後、NGO 団体の分析を通じて、フジ・ロックが反核・原発問題に最も関心を持っている。それは、日本で2011年に起きた311原発事故のため、反核の問題が最も重視されている。そして、311原発事故をきっかけに、近年台湾の人々は反核が関心テーマとなっていることがわかった。

したがって、上述のような日台音楽フェスの考察から、米英における対抗文化が、日本と台湾でどのように展開したのかについて明らかにすることができた。社会運動はその中で重要な役割を果たしたと言える。さらに社会背景や政治状況の相異により、現在のインディーズが示す姿にもそれぞれの特徴があることが分かった。

レイチェル・マッキノンとトランス問題

伊藤豊(山形大学教授)

カナダ人哲学者のレイチェル・マッキノン(Rachel McKinnon、現在は改名して Veronica Ivy)は、かつてトランスジェンダーの競輪選手として話題となった人物である。マッキノンは 2018 年、女子トラックレース世界選手権で優勝した初のトランス女性選手であり、またトランスジェンダー選手のエリートスポーツへの参加をめぐる、元女子プロテニス選手のマルチナ・ナブラチロワを激しく批判したことで知られる。マッキノンはナブラチロワとの論争において、ツイッターを駆使して攻撃的な発言を繰り返し、賛否両論の世論を広く巻き起こすに至った。

近年、トランスジェンダー選手のスポーツ競技参加は、特に女子競技の分野において、しばしば論争的となっている。一方では、トランス女性選手の女子競技への参加が、運動能力の点で概して肉体的な劣位にあるシスジェンダー女性選手の不利益を招き、フェアな競争が成立しえない状況を作り出してしまふ、という議論がある。他方、トランス女性選手の女子競技への参加を擁護・容認する側からすれば、こうしたトランス選手の排除はそもそも差別的であり、スポーツ界のみならず現代社会が総じて向かうべきダイバーシティやインクルーシブネスといった目標に反する。また、競技における選手のパフォーマンスに大きな影響を与えるのは、生物学的な性差の他にも、個々人の遺伝的な要素やトレーニングの質や環境など様々な要因があり、これらを捨象して競技の公正さを考えようとする自体が、単なる形式論に墮さざるをえないとされる。

はたして上記の主張のどちらが正しいのか、あるいは妥当なのか、にわかには判じ難いものの、トランス女性選手の女子競技への参加が、スポーツ界という限定的な枠組みを越えて一般社会にまで及ぶ多くの深刻な問題(ここではそれらを概括的に「トランス問題」と呼んでおく)を惹起してきたことは、まずもって認められなければならないし、こうした潮流なり現象は、おそらく今後も続いていくであろう。

マッキノンはその過激な発言のみを理由として注目されがちであり、発言内容の適否には諸方面から多々批判があるものの、少なくともトランス問題の本質を先鋭的な形で提示することには、成功しているように思われる。本発表では、こうしたマッキノンの言論を手がかりとして、トランス女性のスポーツ参加をめぐるフェアネスとインクルーシブネスの間の緊張関係、さらには、そうした関係をより広い社会的な文脈に置いたうえで、トランス問題の検討において、今後、いったい何が改めて問い直されるべきなのかといった論点について、比較文化の視点をまじえつつ私なりに考察してみたい。

JACL 機関紙『Pacific Citizen』にみる日系アメリカ人朝鮮戦争兵士像

——1950年代日系二世の市民権問題と社会参入

臺丸谷美幸(水産大学校准教授)

本稿は日系アメリカ人市民同盟 (Japanese American Citizens League、JACL) の機関紙『Pacific Citizen』(『PC』) の分析を通して、朝鮮戦争(1950-1953)へ従軍した日系アメリカ人(日系人)兵士に対する当時の社会的評価を明らかにすることを目的とする。従軍者は主に日系二世であった。JACL は米国における「最古かつ最大のアジア系アメリカ人の人権団体」であり、JACL は第二次世界大戦下、米国西海岸の日系人に対して実施された強制立ち退き、収容政策にも深いかかわりを持つ。『PC』は一団体の機関紙ではあるものの、新聞記者経験のある日系二世たちによって製作された本格的な新聞形式のメディアであり、1940~1950年代の日系人コミュニティを理解する上でも貴重な資料である。『PC』は現在、日本国内でも閲覧可能であるが、本紙を扱う研究は乏しい。Robinson(2012)は『PC』の全貌を明らかにする数少ない研究であるが、『PC』の設立経緯や第二次世界大戦期の JACL の活動に焦点が当てられており、第二次世界大戦終結後の日系コミュニティにおける本紙の役割、また記事内容自体を考察するものではない。臺丸谷(2019)では『PC』の記事を基に、1953年のヒロシ・ハーシー・ミヤマラ(Hiroshi “Hershey” Miyamura)軍曹への米国議会黄金勲章授与に注目し、当時の JACL がミヤマラの功績をいかんにして日系二世男性全体の社会的評価を高めるために巧みに利用していったのかを考察した。本稿ではミヤマラの叙勲の例だけに留まらず、朝鮮戦争期の『PC』における日系人兵士像を広く検討する。特に朝鮮戦争開戦直後の1950年から1951年の報道に焦点を当てる。そして朝鮮戦争期の二世兵士像の分析を基に当時の JACL がどのような戦略で日系二世の社会進出を目指していたのか。そのイメージ戦略は後年の日系人の戦後補償運動といかに連動していくのか、1950年代の日系一世、日系二世の市民権問題にも留意しつつ考察していきたい。

## 研究発表

教室7(C206教室) 第1部 14:00~15:30

太平洋戦争勃発前における堀悌吉の軍縮政策とのかかわり  
—大角人事での失脚過程と盟友山本五十六との最後の別れまで—  
梶山剛(鳥羽商船高等専門学校准教授)

今回は山本五十六の海兵学校時代からの盟友であった大分県杵築市出身の堀悌吉について考察する。悌吉は幼少期から、父親に連れられて近くの宇佐神宮ばかりでなく、伊勢神宮参拝に来たこともあり、当時の軍部としては珍しい平和主義路線の考え方を持っていた。

ところで、1933~1934年にかけて、海軍内部で当時の大臣の名前に由来する「大角人事」と称される大規模な更迭人事が行われた。当時の海軍部内においては、条約派(国際協調派)と艦隊派(対外強硬派)の2つの対立構造が存在し、この人事での最後の砦となっていたのが、堀悌吉中將の退役人事である。

第一に、堀悌吉には、日本の国益は世界のすべての人々の幸せを目指すことだというビジョンがあった。これは彼の「世界平等文明」という言葉にも表されている。当時このような思想を持っていたことには驚かされるが、現代では当たり前のこの考えも、当時の海軍ではかなり異端視されていた。言い換えれば、堀悌吉は海軍軍政主流を継ぐ人物と見られており、その国防観はまさしくそれにふさわしいものであったが、当時の海軍軍人としてはある意味「異端」の人物であった。「戦争は悪にして凶」と言い切り、一国の利益を図るのではなく世界の人々が「平等」に豊かになるために貢献することが日本の国益と堀は考えていた。

第二に、戦後、海軍関係者は、堀悌吉が早く予備役になった背景の一つに、彼があまりにも先が見えすぎて、周囲の人たちにその真意が理解されずに誤解を受けた側面もあったのではないかと語っている。しかし、堀悌吉は明敏な頭脳で考え抜いた軍事エリートとして、「自分が願っていた海軍や日本の在り方に貢献することが、自分の生き方だ」という信念は曲げなかった。そのため、昭和初期の海軍では、堀悌吉のような存在が受け入れられる余地はなかったのかもしれない。

結局のところ、条約派と艦隊派という両者の『つば競り合い』の中で、前者の中心人物のひとりで、海軍きっての逸材と言われた堀悌吉が、退役に追い込まれるまでの過程を中心に、貴重な史料や写真を扱いながら検討していく。同時に、山本五十六が真珠湾攻撃を計画し、1941年12月8日に日本が太平洋戦争に突入していく直前まで、親友堀悌吉だけには山本が本音を漏らしていた一連のやり取りにもふれながら、述べていくこととする。

### 【主要参考文献】

- ・宮野澄『不遇の提督 堀悌吉』、光人社、1990年。
- ・大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書 堀悌吉資料集』、全巻、大分県教育委員会、2005、2006、2016年。
- ・麻田貞雄『両大戦間の日米関係—海軍と政策決定過程—』東京大学出版会、1993年。

## 研究発表

教室7(C206教室) 第1部 14:00~15:30

莫言の「魔術的リアリズム」が映し出すもう一つの中国近現代史

—『赤い高粱一族』『白檀の刑』を手掛かりに—

耿義(宇都宮大学地域創生研究科博士後期)

2012年ノーベル文学賞受賞の莫言の長編小説は義和団事件や日中戦争、国共戦争、文化大革命、改革開放政策など、魔術的リアリズムの手法により中国の近現代史を背景にした壮大な構想に支えられている。しかも、義和団事件や日中戦争などを、政府を中心とした社会の上層部を中心に描かれることなく、民衆や民間のレベルで書いていく。その中で『赤い高粱一族』(1987)と『白檀の刑』(2001)は代表的な作品である。両作品は、ドイツによる鉄道敷設とそれに対する中国民衆の抵抗、及び日本による侵略とそれに対する民衆の抵抗を扱っている。いわゆる清末から中華人民共和国を建国までの数十年の歴史を跨い、内憂外患の中国近代史を映し出した。そして中国政府が述べる戦争歴史と異なり、農民に焦点を合わせ、農民の歴史を描いた。一方で、中国の『白檀の刑』と『赤い高粱』に関する研究は主に歴史、民族精神の側面から論じられてきたが、農民に対する関心が不足である。そこで、本発表ではこの両編の小説を分析し、正史から消去された農民たちの歴史を浮き彫りにすることによって、中国共産党が推し進めた農民革命の意義を問い直したい。以下の要領で考えてみたい。

1. 莫言は農民群体に焦点を合わせる意図
2. 魔術的リアリズムの中国近代史
3. 残酷的な中国処刑文化
4. 汚い農民文化と反抗精神

## 研究発表

教室7(C206教室) 第1部 14:00~15:30

戦時下帝国日本と英領マラヤにおける戦争文学の〈原住民〉表象をめぐる比較文学的研究  
:理論的枠組みの整理と批判的検討  
二村洋輔(至学館大学助教)

アジア太平洋戦争戦中期、日本の文学者たちはその立場・思想等に基づき様々な形でその凄惨な戦争に関与した。開戦後積極的に帝国日本のプロパガンダの「一機関」として積極的に戦争に関与していった文学者が数えきれないほどいる一方で、そのような思想的潮流に抗いながら芸術活動を続けたものもいる。この傾向は当時の「敵国」とみなされていた国においても同じことがいえるであろう。

そのような戦時下の作家たちの文学活動に関して、発表者は帝国日本と英領マラヤの戦争文学、その中でも特にアジア太平洋戦争を主な題材として描く文学を比較文学的視点から検討する研究プロジェクトを開始したが、本発表では、その研究プロジェクトを推進していく上で重要な理論的枠組みの整理と、その批判的検討の成果を報告する。

これらの文学は従来、それぞれが日本文学・英文学の各研究分野において、交わることのない別個の研究対象として研究されてきたが、発表者が現在取り組んでいる研究プロジェクトでは、その研究視座を批判的に再検討し発展させ、比較文学研究の視点から、新たなアプローチをもって同文学を研究することを目指している。その特筆すべき点としては、同プロジェクトが、これまで注目されてこなかった〈原住民〉という概念に注目し、同文学の新たな読みの可能性を提示することを目指しているということである。それにより、アジア太平洋戦争の戦争経験を「日本」と「現地」双方の視点から批判的に再構築することを目指している。戦後76年を経て、戦争の直接的な経験を持たない世代が社会に増え続ける昨今、日本と現地双方の視点から先人の戦争経験を包括的に再検討することは切要な課題であるといえる。

先住民族の文化財とは 一日台の文化財制度を通して考察—  
陳由璋(北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員)

先住民族は、1970年代から国際的に広まるようになった新しい概念であり、2007年の国連総会において「先住民族の権利に関する国連宣言」(国連宣言)が採択されたことにより、国際社会に定着してきた。日本では、2008年に国会の衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で可決され、内閣も、アイヌ民族が日本の先住民族であると正式に認め、総合的なアイヌ政策の確立に向けて検討を始めた。その成果のひとつが2019年に制定された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律であり」(アイヌ施策推進法)、1条に日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であるアイヌの人々と明記された。このように先住民族には、ただの民族にとどまらず、先住性という要素にもなる様々な政治的・法的意義も含まれる。したがって、現在のアイヌ文化財の概念には、先住民族文化財の意味も含まれておる。

1997年の「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(アイヌ文化振興法)制定以降、国内の文化的多様性を維持する目的で、北海道におけるアイヌ民族の伝統文化の振興が図られるようになったが、アイヌ文化財(アイヌ民族の文化財およびアイヌ民族に関連する文化財)は、日本にとっての重要性という一元的な評価基準のもと、ほとんど保護対象とされてこなかった。しかし、2008年に日本の国会と内閣がアイヌ民族を先住民族として正式に認め、2019年には「アイヌ施策推進法」も施行されており、アイヌ文化財の先住民族文化財としての保護のあり方が現在の課題のひとつとなっている。

他方、台湾では、1980年代以降の民主化の過程において、中華民国憲法の改正により原住民族に法的身分と権利利益が認められ、2016年には「文化資産保存法」の改正とともに、原住民族の文化資産(日本の文化財に相当する。)に関する特別法も成立したが、近年、漢民族文化に同化したとされてきた平埔族も先住民族身分を要求するようになり、その文化財保護も新たな課題となっている。

前述した先住民族文化財に関する国際社会及び日台の先住民族政策の動きを踏まえ、本研究は、戦前から現在までの先住性文化財に関する制度や政策の沿革を概観し、日台先住民族の文化財保護事例を通して、先住民族文化財の概念を検討する。

社会的展開における潮州工夫茶と日本煎茶道の比較

劉煒雲(広島大学大学院人間社会科学研究科博士後期課程／(中国)韓山師範学院講師)

清の時代に中国福建省を中心に成立した工夫茶は潮州工夫茶と日本煎茶道の源流であり、両者はそれぞれの文化、歴史、社会と融合し発展を遂げ定着した。本稿は社会的展開において潮州工夫茶と日本煎茶道の比較をしながら、両者の同一性と差異性を検討したうえで、その原因を究明する。

潮州工夫茶は19世紀初期に確立して以来、この喫茶風習は一般市民の日常生活の隅々に浸透している。潮州工夫茶の社会的展開は日常性及び非日常性という二つの側面から成立している。日常的には、家庭や職場での習慣化された飲用、茶館などでの商業化された飲用、茶会や工夫茶愛好者のサロン化された飲用、などの形が見られるが、祭祀や結婚式などの民俗行事では、その非日常性を見せている。日本茶道の家元制度と異なり、潮州工夫茶は家庭生活における重要な習慣の一つであり、親から子へ、子から孫へとその喫茶方法が伝承される。また、国の文化保護の観点から21世紀初頭から視覚芸術化された潮州工夫茶芸の作法は専門機関での育成が始められている。

それに対し、日本江戸時代の文人趣味の煎茶は幕末に芸道としての煎茶道へと変容し、稽古・煎茶会及び祭祀などの非日常的な展開しか見られない。日本煎茶道の作法と手前は家元制度のもとで、師匠から弟子へと伝授する形となる。

潮州工夫茶は精緻閑雅であると同時に庶民性、大衆性、開放性が特徴であるのに対し、江戸時代の文人趣味から発展し、家元制度により芸道化された日本煎茶道はごく少数の一部の人の教養と趣味にすぎない。両者ともは祭祀の形が見られ、それは茶の神聖性といった性質に当てはまると言える。視覚芸術化される潮州工夫茶芸は台湾工夫茶芸経由の日本煎茶道の影響が見出される。

## 台湾と日本の人名文化 ―改名騒動から考える―

頼錦雀(台湾・東呉大学日本語文学系特聘教授)

名前は人との区別の標識であり、自分のアイデンティティを表すマーカーでもある。日本語教師として、次のような問題で頭を抱えたことを体験している。一つは学習者の漢字表記の名前の読み方のことであるが、もう一つは日本人の名前の漢字表記の読み方のことである。2022年5月17日に日本の氏名の読みがな法制化の中間案がまとめられ、日本人名漢字表記の読み方の難しさがあらためて浮き彫りになった。

筆者は台湾人であるが、大学一年生の時、名前を日本人の先生に「らい キン ジャク」と読まれたので、この名前の漢字表記の日本式読み方は今でも使われている。教え子たちの名前もある時期まで、大学時代の恩師に教わったように日本式の音読みにした。2023年現在では、台湾人日本語教師と台湾人日本語学習者の多くは日本植民地時代からのしきたりと同じように、日本式の読み方で名乗っている者は少なくない。しかし、1991年に客員教師としてシンガポール国立大学に赴任した際、一時間目に学生の名前をカタカナで教えなさい、と学科主任に要求された。多言語社会のシンガポールでは名前の母語発音をローマ字表記にするのがしきたりであるので、学生に名前を口頭で教えてもらってからそれをカタカナ表記にして教えてやった作業であった。その扱い方が台湾と全然違うのでカルチャーショックを受けた。また、韓国の学会の依頼によって講演に行ったとき、開会の前に司会者から「先生のお名前はライ チン チェエでよろしいでしょうか」と丁寧に聞かれて心を打たれた。自分の国の言葉、そして自分が尊重されたと思ったからである。

日本でも台湾でも法律では子の名を付ける権利は親にある。但し、残念ながら、日本ではアイヌ民族の名前の和名化、台湾では植民地住民の名前の和名化及び原住民の名前の漢名化のような歴史があった。そして、日本における悪魔ちゃんの父親のエゴイズムや王子様君の母親の子供に対する愛情表現は結果から見れば、子供を傷つけることになった。台湾では男尊女卑の間違った親の考え方によって「招弟」、「好仔」、「足仔」、「免仔」などの名を付けられた女の子がいた。幸いに2023年現在、日本でも台湾でも、喜ばしくない名前の場合は改名の機会がある。しかし、台湾の一部の人はこの改名の法律を悪用して食べ物欲しさか私欲のために飲食業者や娯楽業者のイベントに合わせて、親からもらった大事な名前を変えた。このような遊び半分の使用状況はもちろん個々人の自由であるが、やはり考えものである。日本語教育現場ではこのような名前に関する日本事情を課題として学習者に考えさせたら、日本語を学ぶとともに日本文化理解の深化に繋がると思われる。

本論文では、日本語教育における日本事情研究の一環として、台湾との比較の視点から (1) 子の名を付けるしきたり (2) 改名に関する法令 (3) 改名騒動などについて述べる。

## 食感表現に関する日中オノマトペの音象徴性

侯宜卓(東北大学国際文化研究科言語科学研究講座 博士後期課程2年)

音象徴の機能とは、個別の音そのものが特定の意志や感情を表現したり、聞き手の興味をひきつけたるために利用されることである。特に日本語のオノマトペは、これを組織的に体系化した語彙システムだと言える(浜野:i)。本研究では日常生活に使われる日本語と中国語の食感表現に関するオノマトペを収集し、日中の食感に関するオノマトペの音象徴性を明らかにすることを目的とする。

日本の料理バラエティ番組『ペコジャニ∞!』と『日本語オノマトペ辞典』から195語のオノマトペを収集し、中国のテレビ番組『回家吃饭(huíjiāchīfàn)』と『中国語擬音語辞典』から39語を分析対象としている。収集したデータから、日中の食感表現におけるオノマトペの音象徴性を以下のようにまとめた。

母音について、①/a/([a]):目立つ、広い、大きい(例:パリパリ、嘎崩 gabeng);②/u/([u]):突き出してから広がること、充満している様子、泡ができてその状態(例:フワフワ、軟乎乎 ruǎnhuhu);③/i/([i]):高音(例:キンキンと滋 zi)、という音象徴性は日中の食感オノマトペで類似している。

子音について、①/p,b/([p][p]):張力のある表面への衝撃または破裂(例:ガブ、叭唧叭唧 bajibaji)、特にp/([p])は辺りに広がる事態(例:プンブン、香噴噴 xiāngpenpen);②/t,d/([t][t][d]):張力の弱い表面を叩く、液体の状態(例:ドロドロ、咕嘟咕嘟 gūdūgūdū);③/k,g/([k][k][g]):固い表面、動作の厳しさ、きつさ、確実さ(例:カリカリ、咔嚓咔嚓 kachakacha);④/s,z/([s][dz][ts][tʂ]):抵抗のない表面を滑る、液体、流動体(例:サクサク、沙沙(shasha));⑤/h/([h][x]):空気の流れ、息、柔らかさ(ホカホカ、軟乎乎 ruǎnhuhu);⑥/l/([l][l]):流れるような運動(例:ツルツル、吐噜吐噜 tulutulu)、という音象徴性は日中の食感オノマトペで類似している。

さらに、日本語の食感を表すオノマトペには、独特な音象徴性がある。母音/o/([o])は粘り気を表し(例:トロトロ)、/e/([e])は野卑を表す(例:ベロベロ)。子音の両唇鼻音/m/([m])は勢いよさや柔らかさを表し(例:モチモチ、ムシヤムシヤ)、/n/([n])は滑りや粘性を表す(例:ネバネバ、ヌルヌル)。また、有声歯茎摩擦音/j/ [dz]は液体が溢れる状態を表し(例:ジワジワ)、とされている。一方、中国語の食感表現においては、子音の/ch/([tʂh])が硬さや鋭さ、短い摩擦を表すことがあり(例:咔嚓 kacha)、/x/([x])は液体、滑りを表すことがある(例:唏溜唏溜 xiliuxiliu)

以上から、日本語と中国語の食感表現には多くの共通している音象徴性があり、それぞれの言語の独自性が反映されていると言える。

## 研究発表

教室8(C205教室) 第1部 14:00~15:30

### 高等学校における女子生徒応援部員の発声技法に関する考察

杉本雅彦(東京未来大学教授)

金塚基(東京未来大学准教授)

岩崎智史(東京未来大学講師)

伝統校の歴史を有する高等学校の多くには、戦前から生徒会や部活動などの組織において応援部を有する学校が少なくない。戦前の旧制中学から戦後に転身した高等学校の多くは男子校であったことから、それら応援部の組織には、バンカラといわれるような男子学生から生徒集団特有の文化や価値観が表出された行動様式、活動形態が前面に押し出されてきたことは周知の事実といえる。しかし、近年では日本全国各地で伝統校の高等学校の男女共学化が進行してきており、それとともに学ランなどで応援活動をリードする女子応援部員の姿が一般化してきている。伝統校における女子応援部長の出現がマスコミ上で報道されることや、また、応援部員のほぼ全員が女子生徒で占められているというケースも珍しい状況ではなくなっている。

これらの背景要因としては、共学化の他に、いくつかの漫画や映画などで女子応援団長を取りあげたものが2000年代以降に人気を集めていたことや、それまでの学校でのバンカラ応援部による、ある意味で過激な自治活動に管理の浸透が及んだため、そうした伝統的な儀式活動が制約されるに至ったことなども挙げられる。いずれにせよ、それまで男子生徒を中心とした伝統的な価値観に基づく応援部の活動文化は、大きな変化を迎えていることはほぼ間違いないといえよう。

よって本研究では、集団的な応援活動を応援部員としてリードするために欠かせないといわれる応援技法のうち、とくにその発声技法に焦点をあて、発声技量の向上が男子生徒の応援部員の場合と同様に客観的に可視化されるのかどうか実験により考察することを目的とする。今回はそのアプローチの一環として、応援団の応援技法における発声のあり方に焦点をあて、実験により、①女子生徒と男子生徒による発声音の違いを明らかにする、②発声訓練期間の違いによる成果要因を明らかにする。

実験として、香川県高等学校文化連盟応援専門部門の応援団員女子生徒7名と男子生徒3名を対象に、同一の応援フレーズの発声を求め、まずデータとして記録する。データをもとに、ケプストグラム分析によりフォルマント周波数を求め、フォルマント同調による第1倍音に注目し、女子生徒と男子生徒との発声音の特徴の違いと、発声訓練期間の違いによる成果要因について分析する。また、第1倍音の音圧レベルを強くする要因について、女子生徒と男子生徒の違いを考察する。

## 津軽弁の音象徴

高橋栄作(高崎経済大学教授)

青森県津軽地方(青森市から西側、弘前市、黒石市、平川市など)で話される津軽弁は、難解な方言とされる。例えば、松本敏治(2017)では、2009 年度から始まった裁判員制度で、裁判員の中に含まれる青森県外出身者が、供述調書に記される津軽弁が理解できないという。また、弘前大学が進める「弘大 × AI × 津軽弁プロジェクト、あなたの津軽弁、標準語にします」というプロジェクトがある。このプロジェクトは、弘前大学の医療関係者にも青森県外の出身者が多く、津軽弁がわからず患者とのやりとりに困るので、津軽弁を標準語に翻訳するシステムの構築を目指しているという(日本経済新聞電子版 2020/ 1/ 26)。このような難解な津軽弁にはどのようなイメージがあるのだろうか。

Saussure (1916)が、音と意味の関係は恣意的であるとして以来、音と意味の関係はあまり議論されて来なかったようであるが、Sapir(1929)等によって母音の感じ方の違いが「口腔の膨張」の相違によるものや声帯の振動数の相違による可能性が論じられて以来、心理学や音声学の領域で活発に研究が進んで来たという(川原・桃生 2017)。さらに、takete-maluma 効果(Kohler 1929)、bouba-kiki 効果( Ramachandran 2003)では、音と形が結びつけられることがわかった。例えば、/bouba/は丸い形に結びつけられ/kiki/は尖った形に結びつけられるという。川原・桃生(2017)は、阻害音は口腔内気圧が上昇するために、非周期的な音(破裂、摩擦)を起し、この音響的な圧力変化が「角ばった」イメージを示すという。有声阻害音は、日本語では「大きい、重い、強い」イメージを持つ可能性があるとしている。

そこで本研究では、「津軽弁のイメージ」について有声阻害音が東京方言と比較して多いのか少ないのか考察した。「今すぐ話せる津軽弁」に記される 154 個の津軽弁とそれを東京方言に訳した語(例、うだで — すごい、ゆるぐね — きつい など)に含まれる有声阻害音の数を比較した。結果は、津軽弁は 1081 音素中の 10.36%が有声阻害音であり、東京方言は 1392 音素中の 5.52%が有声阻害音であった。統計的検定の結果、有声阻害音の数に、優位な差がみられた。有声阻害音が多いことから、津軽弁の音象徴は「大きい、重い、強い」イメージがあるといえる可能性がある。佐藤他(2003)による「方言主流社会」では心理的距離が近いことを示し易くしていると言える可能性がある。川原・桃生(2017)によれば、音象徴は聴覚情報が視覚情報と結びつけられるだけでなく、音声感覚と味覚の関係や触覚との関係も示唆するという。「言語と意味の繋がり」という言語学内部の問題ではなく、「諸感覚間のつながり」という人間の認知機能一般に関わる問題となっているという。

さらに、松本直子(2012)によれば、言語音と図形の視覚的印象の間に一般的にみられる連想関係は、幼児の段階から見られることから生得的なものであるが、大脳皮質角回に損傷のある人や自閉症の人にはこの結びつきが見られないという。音象徴による分析が、学際的に広がる可能性が示唆されることを本研究で示す。

## 研究発表

教室8(C205教室) 第2部 15:40~17:10

GIGA スクール構想下における公立中学校生徒の ICT 機器使用状況と意識に関する調査

斎藤隆枝(帝京大学講師) 河内健志(前橋工科大学講師) 高橋栄作(高崎経済大学教授)

文部科学省主導の「一人一台の情報端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する GIGA スクール構想」が本格始動して3年が経過し、初中等教育で ICT 機器を活用した授業が定着しつつある。筆者らが GIGA スクール構想導入初期の 2022 年に公立中学校 3 校を対象に実施した調査では、学校外で ICT 機器を学習以外の目的で長時間使用する非都市部在住の中学生は英語学習意欲が低いこと、しかしその傾向は都市部や都市辺縁部在住の中学生には見られないことが明らかになった(斎藤、河内、高橋, 2023)。このように、中学生の ICT 機器使用状況には中学校の立地や特色に準じた差が存在することが分かっている。そこで、本研究では GIGA スクール構想導入からさらに時間が経った時点で生徒たちの ICT 機器使用状況と意識にみられる変化を明らかにすることを目的として調査を実施した。

本研究では北関東の公立中学校 4 校の 2 年生を対象に、ICT 機器使用状況、意識及び英語学習意欲等の 28 項目から構成したアンケート調査を実施した。調査は各校の英語教員の協力のもと、2022 年 7～9 月にオンライン形式で行い、4 校から計 306 件の有効データを収集した。さらに 2023 年 3 月に追跡調査を実施した。

調査の結果、すべての学校で学習目的以外の ICT 機器使用時間が長い生徒は英語学習意欲が低くなること、学校外では学習目的で ICT を利用する生徒は少なく、また、学習目的の ICT 利用時間の長さや英語学習意欲に相関がないことが確認された。そのほか、ICT スキルと英語学習意欲には正の相関があること、また、生徒は ICT 機器を使用した授業の方が使用しない授業よりも分かりやすいと感じること、そして ICT 機器を使用した授業をもっと受けたいという意欲を持っていることが明らかになった。この結果から、中学校においてさらに ICT 機器を活用した授業を受けたいという生徒の意欲に沿うような授業設計が必要であると考えられる。

さらに発表では、「学習目的外での ICT 機器使用時間の増加が生徒の学習意欲低下への影響についての分析」、「学年末に実施した追跡調査との比較」、そして「生徒らが高い意欲を示した授業内アクティビティ」についても報告する。

## 研究発表

教室8(C205教室) 第2部 15:40~17:10

### クラスにおける制御と裁量の関係性 ―高専と大学の比較―

藤山和久(広島経済大学准教授)

同じ高等教育機関であっても、高等専門学校(以下「高専」と)大学ではクラスにおける制御と裁量に違いがあると考えられる。高専の場合、山田(2018)が指摘するように、「同質な環境で学ぶ」(136 頁)ことが特徴の一つとして挙げられる。つまり、多くの場合、同一の学習者かつクラス単位で授業が行われるため、学生の学習を制御しやすい傾向にあると言える。これによって、学習者の裁量は低下することになる。一方で、金子(2007)は大学という機構に関して、「学生の学習に対するフォーマルな制御機構が弱い」(115 頁)と指摘する。制御機構とは、学生の行動やその様式を統制する要素と位置付けることができるだろう。確かに大学の場合、高専あるいは高等学校とは異なり、ホームルーム(学級制)が必ずしも設置されているとは限らず、基本的に授業科目の履修や単位取得に関して、学生がその責任を負うことになる。すなわち、大学においては裁量が高いということになる。ここが、高専と大学における制御機構の大きな違いの一つであると考えられる。制御が強ければ、学生を統制しやすいが同時に学生の裁量は低下してしまい、主体的能動的な学びを阻害してしまう可能性がある。一方で、裁量が大きければ、主体的能動的な学びを担保できるが学生を統制することが困難になってしまう。このように、制御と裁量の度合いの違いが学習者に何らかの影響を与える可能性がある。

そこで本研究では、高専と大学でのクラスにおける制御と裁量の関係性に着目して考察を進めたい。具体的には、高専生と大学生へのインタビュー調査を手がかりに、制御機構に関するいくつかの要素を探究し、それらが学生の学習面や生活面にどのような影響を及ぼしているのかを示したい。

## 引用文献

金子元久(2007)『大学の教育力―何を教え、学ぶか―』筑摩書房。

山田宏(2018)「高専卒業生の自負と無念さ―卒業生の自由記述より―」矢野眞和・濱中義隆・浅野敬一編『高専教育の発見―学歴社会から学習歴社会へ―』岩波書店, 120-145 頁。

## 研究発表

教室8(C205教室) 第2部 15:40~17:10

大学生におけるエンゲージメントとソーシャルアントレプレナーシップ<sup>1</sup>の関係性について

—学生 NPO 法人の活動の検証から検証する

田島喜代美(常葉大学非常勤講師)

### 研究概要

本研究は、ある学生 NPO 法人<sup>2</sup>を研究対象とした 7 年間にわたる参与観察を通じて、大学生のソーシャルアントレプレナーシップ形成のプロセスについて報告する。大学生がエンゲージメントを高めることで、ソーシャルアントレプレナーシップ能力の育成や発展に重要な影響を与えるという仮説に基づき、多様なステークホルダーへのインタビュー、大学生の参与観察、および NPO 法人の設立や活動に関連する分析を行い、大学生のエンゲージメントとソーシャルアントレプレナーシップの関係性について検証する。

### 研究の背景

国内においても、ソーシャルアントレプレナーシップを教育の中で取り上げている大学や教育プログラムは存在する。しかし、日本においては普及が進んでいるとはいえ、ソーシャルアントレプレナーシップを教育プログラムやシラバスの一部に組み込むだけでは、社会起業を実現することは困難であるという現実がある。

### 研究目的

本研究の目的は、大学生がソーシャルアントレプレナーシップの能力を発揮するために必要なエンゲージメントの形成について、7年間の参与観察を通じて明らかにすることである。

### 研究の方法

NPO 法人わたぼうしブランドデザインの活動への参与観察および構成する大学生の調査およびステークホルダーに対する調査

### 調査の結果

大学生のエンゲージメントを高める要因とソーシャルアントレプレナーシップの関係性の視点からまとめる。

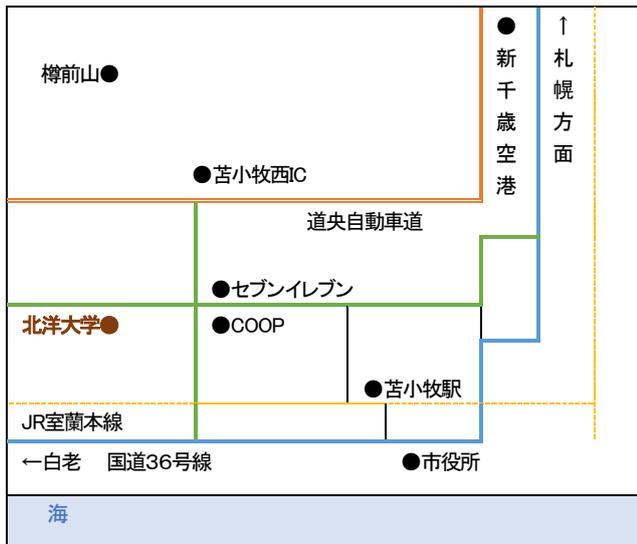
### 考察と結論

大学は、アントレプレナーシップに関する知識の提供だけでなく、学生がアイデアを創造し実現する機会を作り、ステークホルダーとの連携や実践的なプログラムを通じて学生のエンゲージメントを高めることが、大学生の社会起業につながると考えられる。

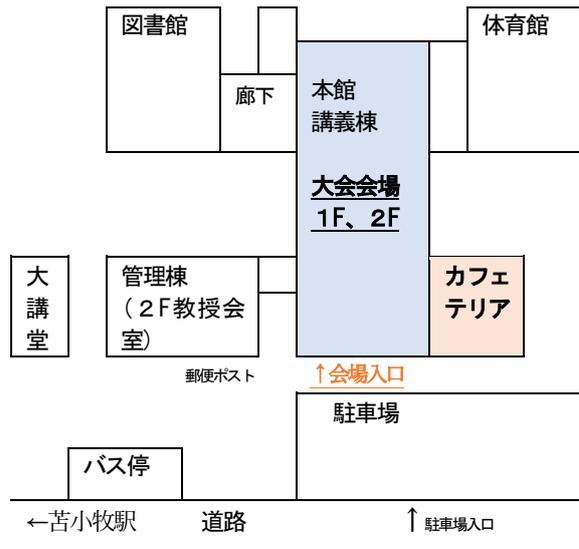
<sup>1</sup> 大学生のエンゲージメントとは、教育に対する積極性に加えて、大学内のコミュニティの活動、イベントやサークル活動、学外の社会的活動にも積極的に参加することを意味し、市民性、社会的責任を涵養する。ソーシャルアントレプレナーシップは、社会的課題の解決に対して、創造的、革新的なアイデアで貢献することで、新しい社会価値を提供することを目的とした事業活動である。

<sup>2</sup> NPO 法人わたぼうしブランドデザイン： 2017 年から市民団体として活動して以来、2021 年 3 月 NPO 法人として、浜松市から認証された。3 人の学生が卒業と同時に理事に就任して理事会を構成し、次期学生が卒業すると理事に就任して大学生を支えていく。時間をかけて組織の厚みを増すことで、持続可能な組織としての構成を目指している。

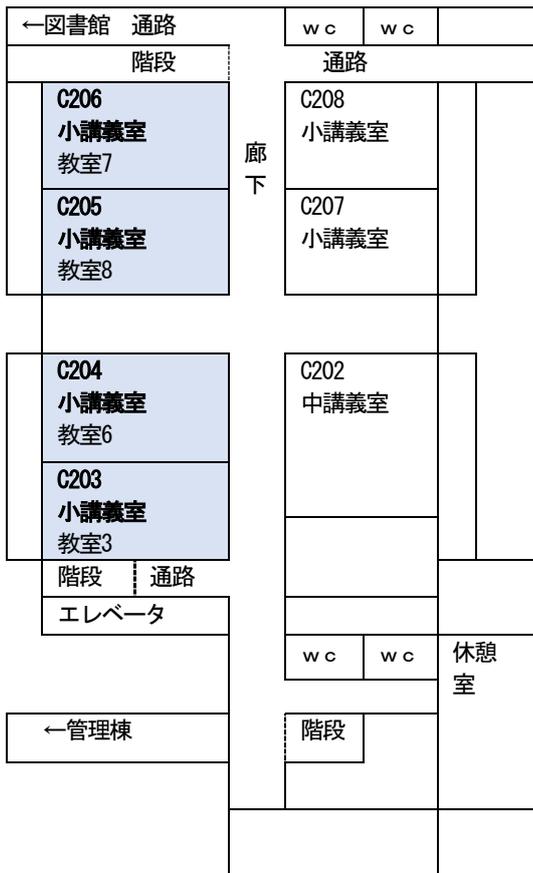
### 北洋大学へのアクセス図



### 大学建物全体図



### 本館講義棟 2F 大会会場案内図



### 本館講義棟 1F 大会会場案内図

